



TITLE:

## フツサールの現象學(二)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

---

CITATION:

米田, 庄太郎. フツサールの現象學(二). 經濟論叢 1925, 20(3): 501-516

ISSUE DATE:

1925-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128259>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 三 號      第 二 十 二 卷

大正十四年三月一日發行

## 論 叢

御家人の特質……………文學博士 三浦 周行

課税に於ける家族事情の考慮……………法學博士 神戸 正雄

フッサールの現象學……………文學博士 米田庄太郎

日銀物價指數の研究……………法學士 沙見 三郎

## 時 論

支那の共和政治の成立<sup>及び</sup>建設……………文學博士 矢野 仁一

小作問題と朝鮮の小作制……………法學博士 河田 嗣郎

## 說 苑

英國經濟學發展の一大觀……………法學博士 財部 靜治

## 雜 錄

佛蘭西財政狀態と相續税……………經濟學士 小川福太郎

海運同盟の<sup>研究に關する</sup>參考資料<sup>について</sup>……………法學士 小島昌太郎

## フッサールの現象學 (二)

米田庄太郎

### (三) 純正論理學の觀念から現象學の概念へ

#### ——「論理學的研究」の現象學の概念

フッサール氏は「論理學的研究」第一卷の終りの章に於て、純正論理學の觀念を確立して居るから、同書第二卷は當然其の觀念に基いて、純正論理學の體系を組織的に論述するものであらうと豫期されて居た。然るに其の後公にされし同卷は、豫期されし如くに純正論理學の體系を論述するものでなく、其の第一冊は「認識の現象學及び理論に關する研究」(Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis)と題され、又其の第二冊は「認識の現象學の解明の要義」(Elemente einer Phänomenologischen Aufklärung der Erkenntnis)と題されて居て、論理學の認識論的解明及び其の將來の建設の準備仕事を取扱へるもの、つまり主として思惟の現象學的分析を取扱へるものであつた。かくて同氏が「論理學的研究」第一卷に於て確立された純正論理學、全然心理

學主義を排斥する論理學の觀念に非常なる興味を感じ、そうしてかゝる純正論理學觀念に基いて建設される純正論理學の體系は、如何なるものであるかを知らんとて第二卷の出版を鶴首して待つて居た人々は、少なからぬ失望を感じたと思はれる。併しよく考へて見れば、フッサール氏が純正論理學の體系の建設に着手する前に、同氏が思惟及び認識の現象學的分析と稱する一種の認識論を論究せんとしたのは、論理學の研究の順序に於て當然であると思はれる。吾人は先づ認識論を確立した上でなくば、到底論理學の體系を建設することは出来ないもので、近來の學問論（Wissenschaftslehre）の一般の研究順序は、先づ認識論から出發して論理學に移り、夫れより方法論に進むことになつて居るのである。只フッサール氏は論理學の研究に熱中するあまり、先づ純正論理學とは如何なるものである可きやを、第一に規定せんとしたゞけである。しかも其の純正論理學の觀念を實現せんとするに於ては、矢張り學問論研究の論理的順序に従ひ、認識論から始めねばならなかつたのである。是れ「論理學的研究」の第二卷が認識論的研究となつて居る所以であると思ふ。しかも同氏は矢張り論理學の研究を主眼とするが故に、其の認識論的研究を論理學の準備仕事と見て居るが、余は夫れは寧ろ論理學の基礎としての認識論の研究と見る可きであらうと思ふ。如何なる論理學も何等かの認識論を基礎とせねば建設され得るものでなく、又如何なる認識論も論理學に發展せざるを得ないのである。然らざれば學問論は完成されない。余は先づ

以上述べし點に注意して置いて、是れより主として「論理學的研究」第二卷の序論に就て、フ・サル氏が純正論理學の概念から現象學の概念に移られた所以、及び其の現象學の概念は如何なるものであるかを大體上究明し、以て「純正現象學及び現象學的哲學考」の現豫學を深く理解する準備をしたいと思ふ。以下説述する處は主として同序論によりて、フッサール氏の見解を述べたるものである。

夫れ論理學に於ては先づ言語の分析から始めねばならぬ必要は、論理術論に於て早くから認められて居たが、今純正論理學の研究に於ても吾人は矢張り、言語の分析から始める必要を感じるのである。是れ吾人は先づ言語を論究しなければ、命題或は文章の意義を究明することが出来ないからである。言語論究は純正論理學の建設に對して必要缺く可からざる準備である。吾人は其の援助によりてのみ、論理學的研究の特有の對象、更に其等の對象の本質的種類及び差別を闡明せねばならないのである。併し此處に言語論究と云ふは、歴史的に與へられたる言語に就て行はれる經驗的意味での文法論究を意味するのではなく、一の客觀的認識論及び夫れと最も内部的に結合する處のもの、即ち思惟體驗及び認識體驗の一の純正現象學の廣い範域に屬する論究を意味するのである。此の思惟體驗及び認識體驗の純正現象學は、夫れを包括する體驗一般の純正現象學の如く、只直覺に於て把握し得られ分析し得られる體驗のみを、其の純本質普遍性に於て取扱

ふ可きものにして、現實なる事實として或は發現する又經驗的な事實として設定されたる世界に於て、經驗する人間或は動物の體驗としての、經驗的に統覺される經驗を取扱ふものでない。此の純正現象學は本質直覺に於て直接に把握されたる本質及び全く本質に基づく結合を、記述的に本質概念並に合則的本質言表 (Wesenssagen) に於て、純粹に表現させるのである。そうして總てかゝる言表は最も著しき意味にて一の先天的なるものである。されば純正論理學の認識批判的準備及び解明の爲めに、充分に探究されねばならないのは、即ち此の範域である。

純正現象學は種々なる學問が其の根柢を有する處の中立的諸研究の一範域である。一方に於ては現象學は經驗學としての心理學を助けるものにして、心理學が經驗的に生物的・自然實在の結合に於ける現實なる事象の諸部類として把握し、經驗學的研究に附する處の表象體驗、判斷體驗及び認識體驗等を、其の本質普遍性に於て分析し記述する。他方に於ては現象學は、純正論理學の認識批判的理解に必要な明亮性及び明確性が與へられる爲めには、再び引き戻されねばならぬ根元を闡明する。純正論理學の認識論的或は現象學的基礎確立は甚だ困難であるが、しかも無比に重要な諸研究を包括するものである。

今思惟と言語との結合は、本質的理由より必然的に生起するものであるや否やを問はずとも、とにかく高等なる知力的範域殊に學問的範域に屬する判斷は、言語的言表なしに成就され得るも

のでない云ふことだけは、何れの場合に於ても確かである。純正論理學が研究する對象は先づ文法的服裝に於て與へられて居るのである。一層充分に云へば、其等の對象は云はゞ具體的な心理的體驗中に埋められたるものとして與へられて居る。そうして夫れは意義志向或は意義充實の機能に於て、一定の言語的表現に屬し、又之れと共に一の現象學的統一を作る。

論理學者は其等の複合的な現象學的諸統一から、彼に興味を起させる構成分、かくて何よりも第一に論理的表象、判斷、認識等が行なはれる作用性を引き出し、之を彼特有の論理學的任務の爲めに有益なるだけ充分に、記述し分析す可きである。併し純正論理學者が根本的に又本來興味を感じるのは、心理學的判斷即ち具體的な心理的現象ではなく、論理學的判斷即ち同一的言表意義 (die identische Aussagebedeutung) である。具體的な思惟體驗の現象學的分析は、純正論理學の本領に屬しない。しかも夫れは純正論理學的研究の爲めに缺く可からざるものであると云ひ得られる。是れ總て論理的なるものは、研究對象として吾人のものとなり、夫れに基づく先天的法則の明證を可能ならしめる可き限り、具體的な場合に於て與へられねばならぬからである。併し論理的なるものは始めには不完全なる形態に於て吾人に與へられて居る。即ち概念は大小なり小なり動搖する語義 (Wortbedeutung) として、又法則は概念から成立するが故に矢張り同様に動搖する主張として、始めに吾人に與へられて居る。もつともかゝる場合にも論理學的洞見は

全く缺けて居るのでない。吾人は明證を以て純正法則を把握し、そうして夫れは純正思惟形式に基づくものなるを認識する。併し此の明證は法則判斷の現實的遂行中に生動する語義に密着して居るものである。そうして注意されない多義或は曖昧によりて、後に他の概念がもとの概念に取り換へられ、今や變化せる命題意義に、さきに經驗されたる明證が誤つて要求され易いのである。又是れと反對に、多義或は曖昧より生ぜる誤解が純論理的命題の意味を變化し、そうして純論理的なるもの、以前に經驗されたる明證及び特有の意義を、放棄させることも亦あり得る。かくて論理的觀念及び夫れによりて構成されたる純法則が、經驗的に與へられて居ると云ふだけで充分でない。そうして論理的觀念即ち概念及び法則を、先づ認識論的に明亮にし且つ明確にせねばならぬと云ふ大問題が起つてくる。此處に現象學的分析が必要となるのである。

夫れ妥當する思惟内容としての論理的觀念は、直觀に於て其の始源を有たねばならぬ。其等の概念は一定の體驗に基いて行なはれる觀念化的抽象によりて生長し、そうして此の抽象が新たに成就される毎に、常に新たに夫れ自身を固持し、夫れ自身との其の同一性に於て把握されねばならぬ。換言すれば吾人が「概念」「判斷」「真理」「其他のもの」に關して、純正論理學に於て設定される諸法則の意義を、其の特殊化と共に反省する場合に、先づ與へられるが如き「單なる語」即ち單なる象徴的語理解 (ein bloss symbolisches Wortverständnis) を以て、吾人は其のまゝで満足する



を欲しない。只遠い曖昧な比喩的な直観のみから生かされたる意義は、吾人に充分なる満足と與へ得ない。吾人は「實質或は物件 (die Sachen) 其物」に遡らんと欲する。吾人は此の此處に現實に成就されたる抽象に於て與へられたるものが眞理にして、眞に語義が法則表現に於て意味するものであることを、完全に發展されたる直観に於て、明證を以て理解せんと欲し、そうして認識實際的には吾人が復現され得る直観に於て充分に繰り返されたる測定によりて、意義を其の恒定不動的な同一性に於て確持せんとする傾向を、吾人に於て覺醒せんと欲するのである。同様に吾人は、種々なる言表結合中に於て同一の論理的術語に生ずる處の、變化する意義の直観化によりて、まさしく此の多義性或は曖昧性を確信する。吾人は語が此處及び其處で意味する處のものが、直観の本質的に相異なる要素或は形成に於て、或は本質的に相異なる普遍概念に於て、其の充實を見出すと云ふ明證を獲得する。かくて吾人は混合せる概念の分別によりて、又術語の適當なる變化によりて、矢張り論理的命題の望まれたる「明亮性」及び「明確性」を獲得するのである。

論理的體驗の現象學は、此等の心理的體驗及び夫れに内在する意味に於て、一切の論理的なる基本的概念に確實なる意味（實に意義志向と意義充實との間に分析的に探究されたる本質結合に遡りて闡明され、其の可能的認識機能に於て理解され、且つ確かめられたる意義、約言すれば純

正論理學其物の關心、殊に此の學科の本質の認識批判的洞見の關心が要求するが如き意義)を與へるために必要なだけ遠大なる記述的(經驗的心理學的記述でない)理解を得んとする目的を有するのである。論理的及びノエチッセン(志向的心理作用的)基本概念は、是れまでは尙ほ甚だ不完全にしか解明されて居なかつた。其等の概念には種々なる多義が附着して居た。否な其の多義性は甚だ有害にして、又之を確定し、更に徹底的區別に於て確定するには甚だ困難にして、純正論理學及び認識論が甚だ停滯せる状態にある最も主要なる理由は、其處に求めらる可きである。

吾人は確かに、純論理的範域の幾多の概念的區別及び區域が、自然的見地に於て、かくて現象學的分析を行はずして、明證に達することを認めねばならぬ。是等の場合に於ける論理的作用は、充實する直觀との充當の適應に於て行なはれるから、現象學的状態其物に關しては反省が加へられない。併し最も完全なる明證さえも混亂され、其の把持するものが誤解され、其の確實なる決斷が排斥されることがあり得る。殊に客觀的見地と心理學的見地とを不注意に置き換へ、其の本質上相互に結び附けられて居るがしかも根本的には區別さる可き其等兩方面の所與を、全く相互に混交し、かくて論理的に客觀的なもの、解釋に於て、心理學的誤解によりて欺かれ易き哲學的反省の決して偶然的でない傾向は、幾多の解明的研究を要求する。そうして此等の解明

は其の性質上、只思惟體驗及び認識體驗の現象學的本質論によりてのみ、(其等の體驗に本質的に屬する處の意味されたるものを、絶へず顧慮しつゝ)成就し得られるのである。只純正現象學(動物學的實在の心理的形質及び狀態の經驗學としての心理學とは全く異なるもの)によりてのみ、心理學主義が根本的に征服され得るのである。只純正現象學のみが余輩の範域に於ても亦、純正論理學的基本區別及び洞見總體の最後の充分なる確立に對する、一切の前提を與へるのである。只純正現象學のみが、本質根元から迸發し、かくて始めには避け得られない處の誤れる傾向、即ち客觀的に論理學的なるものを心理學的なるものに曲解せんとする傾向を、全く取り除くのである。

右に述べし現象學的分析の動機は、容易に見られる如く、最ども普遍的なる認識論的基本問題から發出する動機と、本質的に結び附いて居る。是れ吾人が其等の問題を最廣普遍性(明らかに一切の「認識質料」から抽出されたる「形式的なるもの」の意味)に於て把握すると、其等の問題は純正論理學の觀念の完全なる解明に屬する諸問題の圈の中に入るからである。即ち一切の思惟及び認識は對象或は實質(Sachverhalte)に向ひ、其等の對象或は實質の「自實在」が、現實的又は可能的なる思惟諸作用或は諸意義の多樣に於て、同一化し得られる統一として現はれねばならぬと云ふ様に、明らかに其等の對象或は實質と關係すると云ふ事實、更に一切の思惟には觀念的法則

(實に認識一般の客觀性或は觀念性を規定する法則)の根柢に存する思惟形式が内住すると云ふ事實、此等の事實は常に繰り返して左の問題を起すのである。即ちさらば客觀性の「自體」が「表象」に、否な認識に於ては「把持」に達し、かくて極局は矢張り再び主觀的となると云ふことは、如何に理解せる可きか。對象は「夫れ自身に於て」存し、そうして認識に於て「與へられる」とは、何を意味するか。普遍的なるものの、觀念性が、如何にして概念或は法則として、現實的な心理的體驗の流れの中に入り込み、思惟者の認識所有となるか。併し今此等の問題及び類似の問題は、純論理的なるもの、解明に關して、上に論述せる問題と全く不可分的であることは明白である。概念及び對象、眞理及び命題、事實及び法則等の如き論理的觀念の解明の任務は、吾人が現象學的分析に於て目的とする解明其物の本質が、明らかにされる爲めに是非研究せねばならぬ問題に、吾人を不可避的に導くのである。

さはれ現象學的分析は甚だ困難なるものである。そうして其の一切の困難の根元は、現象學的分析に於ては、自然的見地に反する直觀及び思惟の方針が要求されると云ふ點にある。現象學的分析にありては、吾人は種々相重り合ふ諸作用の遂行中に入り込み、又夫れと共に其等の諸作用の意味の中に考へられたる對象を、云はゞ素朴的に實在するとして定置し規定し或は假言的に据ね附け、夫れから歸結を引き出すのではなく、寧ろ「反省」せねばならない、即ち其等の作用及び

夫れに内在的な意味内容を對象とせねばならないのである。對象は直觀され、思惟され、理論的に考量され、そして其の場合に何れかの存在様式に於て實在として定置されて居るが、余輩は余輩の理論的關心をかゝる對象の上に向け、かゝる對象が其等の作用の志向に於て現はれ或は妥當するがまゝに、之を實在として定置してはならないので、夫れと反對に是れまでは全く對象的でなかつた其等の作用其物を、今や把握及び理論的定置の目的物となす可きである。余輩は其等の作用を新しき直觀作用及び思惟作用に於て考察し、其の本質に従ふて分析し記述し、經驗的又は觀念化的思惟の對象となす可きである。併しかくすることは、吾人の心理的發達の始めから常に高まり來れる固定的習慣に反する一の思惟方針である。されば常に現象學的思惟態度から、素樸的客觀的態度へ後戻る傾向が起るのである。尙ほ其の外にも幾多の困難がある。併し純正現象學一般殊に論理的體驗の純正現象學が遭遇する困難は如何に大なるとも、夫れは決して夫れに打ち勝たんとする企だてを、全く望なきものと思はせる様な性質のものでない。余輩は一致協力して熱誠に研究を進めて行くことによりて、其等の困難に打ち勝ち得るのである。

以上述べし現象學の意味をよく理解する時は、組織的現象學的認識解明としての一切の認識論は、つまりは心理學の上に建設されるので、純正論理學から心理學主義を全然驅逐せんとする企だては、遂には失敗に歸すると云ふが如き非難を、何人も敢て余輩に加へることは出來ないであ

らう。心理學と云ふ語が若し其の古い意味を保持するならば、現象學はまさしく記述的心理學でない。現象學特有の「純」記述即ち體驗的事實的個別觀照に基いて成就される本質觀照、並に純正觀照に於て觀照されたる本質を、記述的に固定することは決して經驗的（自然科學的）記述でない。夫れは寧ろ一切の經驗的（自然主義的）統覺及び設定の自然的作用を全く排斥するのである。知覺、判斷、感情、意欲等に關する記述心理學的確定は、自然實在の動物的本質の現實的狀態を取扱ふものにして、物理的狀態に關する記述的確定と全く同様なものである。此處では總ての普遍的命題は經驗的普遍性を有する、即ち自然に對して妥當する。然るに現象學は動物的本質の狀態に就ては全く述べない。夫れは知覺、判斷、感情等に就てあるがまゝのものととして述べ、其等のものに先天的に、無制約的普遍性に於て、まさしく純粹なる種の純粹なる個體として妥當する處のものに就て述べ、全く「本質」（本質類、本質種）の純直覺的把握に基いて洞見さる可きものに就て述べるのである。夫れは純正算術が數に就て、幾何學が空間形態に就て述べるものと全く同様である。かくて純正論理學的解明（總ての認識批判的解明の如く）の基礎となるのは、心理學ではなくて現象學であるのである。尙ほ夫れと同時に現象學は、其の全く異なる機能に於ては、一切の心理學（完全なる權利を以て嚴格に學的と稱し得らる可き）の必然的基礎にして、恰も純正數學例へば純正空間論及び純正運動論の如きものが、一切の精密自然科學（其の經驗的形態、

運動其他のものと共に研究される經驗的事物の自然論)の必然的基礎であるが如くである。更に知覺、意欲及び總ての種類の體驗形態に關する本質洞見は云ふまでもなく、幾何學的洞見が自然の空間形態に妥當する如く、動物的なるもの、夫れに相應する經驗狀態に妥當するのである。

夫れ眞に學的であらんとする認識論的研究は、既に哲學者によりて屢々強調されし如く、無前定性の原理(*das Prinzip der Voraussetzungslosigkeit*)に従はねばならぬ。併し此の原理は、余輩の見る處によれば、現象學的に完全に實現され得ない一切の言表(*Aussagen*)を、嚴格に排除すると云ふより以上のものを意味し得ない。總ての認識論的研究は純現象學的基礎の上に行はれねばならぬ。夫れに於て求められる理論は、實に左の諸問題に關する反省及び明證的理解に外ならぬ。

「思惟及び認識は一般的に、即ち其の類の純本質に従へば、何であるか。思惟及び認識が本質的に拘束される諸形成及び諸形式は何であるか。如何なる内在的構造シュトラクチャーが思惟及び認識の對象的關係に屬するか。かゝる構造例へば妥當、辨明(或は正當として辨明すること)などの觀念の如きものに關して、直接的及び間接的明證並に其の反對は何を意味するか。かゝる觀念は可能的認識對象の諸領域と平行して、如何なる特殊化をなすか。形式的及び實質的思惟法則は、其の意味及び其の作業に従ふて、認識する意識の其等の構造的本質結合との先天的關係によりて、如何に解明されるか。其の他の問題」。認識の意味に於ける此の反省が、單なる意見を産出するだけでな

く、洞見的覺識ヴァイ费尔ンを產出す可きものならば、夫れは純本質直覺として、與へられたる思惟體驗及び認識體驗の實例的基礎に於て、行なはれねばならぬ。

認識する思惟の觀念的本質及び妥當の意味に關する普遍的解明としての認識論は、認識體驗を根本的に超越する事物的「眞實」對象の覺識或は理性的推量が可能であるか、又如何程可能であるか、そうしてかゝる覺識の眞實なる意味は、如何なる規範に従はねばならぬかと云ふ普遍的問題を含む。併し吾々人間は吾々に事實上與へられたる資料に基いて、かゝる覺識を現實に獲得し得るや否や、或は此の覺識を實現す可き任務を有するや否やと云ふが如き、經驗的に適用されたる問題を含まない。吾々の考へによれば、認識論は嚴密に云へば全く理論でない。夫れは理論的説明からの一の統一の充分なる意味に於ける科學でない。理論の意味に於て説明することは、つまり普遍的法則から個別を理解すること、及び更に普遍的法則をグランドゲゼツ原則から理解することである。此の場合事實の範域に於ては、事情の與へられたる結合の下で、何が必然的に即ち自然法則に従ふて起るかと云ふ知識が取扱はれる。又先天的なるもの、範域に於ては、包括的な一般的必然性から、及び最後には最も原始的及び最も普遍的なる關係法則、即ち吾人が公理と稱するものから、下の階段の特殊的關係の必然性の理解が取扱はれる。併し認識論は此の理論的意味に於ては、何物をも説明す可きでない、夫れは全く演繹的理論を構成せず、又かゝる理論の下に調整されるのではない。吾々は此の事を最も普遍的なる所謂形式的なる認識論に於て見るのである。此の諸理論の理論を以て諸理論を解明する形式的認識論は、一切の經驗的理論の以前にある。か



くて一切の説明的實在科學の以前に、一方に於ては物理的自然科學の以前に、他方に於ては心理學の以前に、そうして云ふまでもなく又一切の形而上學の以前にある。形式的認識論は認識即ち客觀的自然に於ける、心理學的或は精神物理的意味に於ける事實的出來事を説明しようとする、併し認識の觀念を其の構成的要素或は法則に従ふて説明しようとするのである。形式的認識論は事實的認識作用の織り込まれて居る共存及び繼續の現實的結合を追求せんとするのでなく、認識の客觀性が證明されて居る特殊的結合の觀念的意味を理解しようとするのである。夫れは純認識形式及び法則を、充當的に充實する直觀に遡りて、明亮性及び明確性に上さんとする。此の解明は認識の現象學、即ち「純」體驗の本質構造及び之れに屬する意味に向けられたる現象學の枠の中に行なはれる。此の解明は其の學的諸設定に於て、始めから又如何進んでも、現實的存在に關しては何等の主張をも保有しない。かくて何れの形而上學的主張も、何れの自然科學的主張も、又特に心理學的なる主張も、此の解明に於て前提として作用するを許されないのである。

却說フッサール氏が「論理學的研究」第一卷の終りに於て、同氏獨得の純正論理學の觀念を確立しながら、第二卷に於て直ちに純正論理學の體系の組織的論述に移らず、先づ其の認識論的準備として現象學的研究の必要なるを覺り、第二卷二冊全部を思惟及び認識の現象學の研究に當てられた所以、并に其の現象學とは大體上如何なるものであるかは、第二卷第一冊序論によりて以上述べし處によりて明らかに理解されると思ふ。要するに「論理學的研究」に於ては、フッサール氏の現象學なるものは純正論理學の認識論的準備として考へられて居るのである。然るに其後同氏

は益々研究及び思索を進めるにつれて、現象學の根本的重要を大に覺り、遂に之を哲學の基本學 (die Grundwissenschaft der Philosophie) として建設せんとするに至つた。そうして其の計畫は先づ千九百十年「ローコス」第一卷に公にされた論文「嚴密なる學としての哲學」(Philosophie als strenge Wissenschaft, Logos I, 1910.) に於て窺はれるが、更に千九百十三年から同氏が發行された「哲學及び現象學的研究年報」第一卷に於ける同氏の著作「純正現象學及び現象學的哲學考」(後單行本として出版されて居る) によりて、吾人は同氏の現象學のかなり圓熟せる概念及び其の根本思想を學ぶことが出来るのである。そうして今日獨逸の社會學者中現象學的方法を社會學に應用せんとする人々の現象學と云ふは、其の現象學のことであり、フッサール派の人々が社會及び文化の研究に適用せんとして居るのも、最近に現はれたるハイデッガー氏の方針の如きものを除けば、一般に矢張り其の現象學である。されば少なくとも今日までの處で、社會學と現象學との關係を研究せんとするに當つて、吾人の先づよく理解して置かねばならないのは、「純正現象學及び現象學的哲學考」の現象學である。それで是れより余は其の現象學に就て稍々詳しく述べたいと思ふのである。併し其の現象學をよく理解する爲めには、先づ「論理學的研究」に於ける純正論理學の觀念、及び其の認識批判的準備及び解明としての現象學の概念を、豫め大體上理解して置くことが肝要であるから、前節及び本節に於て之を述べたのである。是れより「純正現象學及び現象學的哲學考」の現象學を、特に社會及び文化の研究に關して重要な方面に注目しつゝ、一般的に説述することゝする。